

家庭学習を「授業づくり」の一部と捉え、単元構成を工夫

広島県 三次市立三和小学校

思考力や表現力を育てるための一環として、家庭学習の充実を考える三次市立三和小学校。授業と家庭学習を双方から考えようとしているのが特色だ。教師全員で授業改善を進めてきた土壌を生かし、家庭学習についての共通理解を進めている。

取り組みのポイント

- 家庭学習を「授業づくり」の一環と捉える。指導案作成時には家庭学習の工夫を記入することで意識を高める
- 家庭学習と授業の相乗効果で、思考力や表現力の育成を目指し、具体的な実践の在り方を検討する

課題と手立ての基本方針

思考力や表現力に課題

四つの視点で授業を改善

広島県中部に位置する三次市の山間にある三和小学校は、全学年単学級の小規模校だ。子どもはごく少数の大人と接する機会しかなく、卒業後は同じ中学校に進学する。山平弥生校長は子どもの様子を次のように話す。

「教師の言うことをよく聞く素直な子どもが多いのですが、半面、自分の考えを相手に伝える力や、積極的に自ら動く力が弱いと感じます。やがて社会に出て行く子どもたちです。小学生のうちから自己表現する力やコ

S c h o o l D a t a

◎1971(昭和46)年開校。2002年度に文部科学省「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、算数の研究に取り組む。07年度から算数と国語、10年度から国語の研究を通し「論理的思考力・表現力の育成」を図る。



校長 山平弥生先生

児童数 143人 学級数 7学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒729-6702 広島県三次市三和町敷名1496

TEL 0824-52-3158

URL <http://www.miyoshi-miwa-e.hiroshima-c.ed.jp/>

公開研究会 未定

コミュニケーション力を育てたいというのが、教師の思いです」

地域に塾はなく、子どもも保護者も「学校の勉強は大切」という意識が強い。「全国学力・学習状況調査」では全国平均を上回る領域もあるが、子ども間の学力差や、論理的思考力、表現力の育成には課題を感じている。

「どの子どもも意欲があるため、伸びしろは大きいと思っています。また、自分の考えを正確に相手に伝えるためには、論理的に考える力が必要です。子どもの前向きな気持ちを支えながら、どのように論理的な思考力や表現力を伸ばしていくかという視点で研究に取り組んでいます」(山平校長)

授業づくりと共に深める家庭学習

校内研究のテーマは「論理的に考え、表現する力を育てる授業の創造」だ。2010年度は国語に重点を置き、ねらいの達成のために、①書く活動の充実、②ICTの効果的な活用、③単元構成の工夫、④授業と家庭学習との連動、の四つの視点で授業改善を進めている。特に①「書く活動」は、思考と表現の行き来により思考を促す重要な活動と捉え、書くねらい・内容・方法を意識して指導する。同校では「主役は授業」と捉え、家庭学習を授業づくりの一環として位置付ける。

「教師にとって、45分の授業の中で力を付けることが絶対の使命です。家庭学習は、授業で出来なかったことを課すのではなく、次の授業に結び付くものであるべきと考えています。また、どの教師も同じ方針で指導しなければ、6年間を通じて思考力や表現力を育むことは出来ません。学校全体で方針を共有する必要があると考えています」（山平校長）

家庭学習の位置付け ● ● ● 授業との連動をより意識するため 指導案に連動の工夫を記入

家庭学習については、授業改善の視点の一つに掲げられていたものの、授業に比べると担任に任せられる部分が大きく、これまで学校全体で検討することが少なかった。そこで10年度は、教師個々の実践を基に、授業との連

動をより強めるための検討を進めている。研究授業時に作成する指導案にも、「授業と家庭学習との連動」を含めた四つの視点に沿った工夫を記入する欄を設けた。研究主任の愛甲弘先生はそのねらいを次のように話す。

「家庭学習との連動をより意識して授業を構成するためです。更に、事後検討会では、授業の流れや子どもの様子だけに終始せず、家庭学習についても、指導案を基に少しずつ話し合いを進めたいと考えました」

同校では、家庭学習時間の目安を「学年×10+10分」と設定している。毎日、漢字の書き取りや計算練習などの基礎・基本を中心とした宿題を出し、余った時間には自主学習用ノートで自習するように指導する。家庭学習を通じて、「学び方」や「自ら学ぶ」姿勢を身に付けてほしいと考えるからだ。ただし、1〜3年生は自主学習は難しいという判断で、宿題を中心としている。

家庭学習の目的は三つあると、愛甲先生は整理する。一つめは、学習習慣の定着。決まった時間に机に向かう習慣を付けるためのもの。二つめは、ドリル形式の学習によって基礎・基本の定着を図ること。思考力や表現力の育成は、基礎・基本の定着がなければ実現しないと考える。三つめは、思考力・表現力の育成。愛甲先生は、これを家庭学習の重要な目的と位置付けている。

「今後、思考力や表現力を育むことができます

ます重要になります。また、限られた授業時間の中で力を確実に付けるためには、家庭学習にも工夫が必要だと思いました。授業で力を育むことが前提ですが、家庭学習もその一部と考えれば、より力を育めると考えました」

家庭学習の内容提案 ● ● ● 単元構成時に 授業と家庭学習の双方から考える

思考力・表現力を育成するための授業と家庭学習の連動について、学校全体で検討を深めるために愛甲先生が行ったのが「三和小研究便り」での提案だ（P.16図）。その内容について、愛甲先生は次のように話す。

「一般的に、宿題や家庭学習の内容は、単元構成後に授業の進捗を踏まえて設定する『授業との連動を前提とした家庭学習』（図内②）が多いと思います。しかし、授業と家庭学習を連動させる指導では、家庭学習がなけ



三和市長
愛甲弘 Aiko Masahiro
研究主任、6学年担任。「教師が学んでいなければ、子どもに学ばせることは出来ない。自分自身が学び続けたい」



三和市長
山平弥生 Yamahira Yayoi
「モットーは、『教育の姿勢は厳しく、教育の心は優しく、教育の環境は美しく』」

三和小研究便り

授業と家庭学習との連動について

平成 22 年 12 月 1 日
研究担当 NO. 8

授業と家庭学習との連動を研究の視点に掲げているもの、これまでの授業研究会等ではなかなか話題にできず、実践が広がっているとはいえない状況にあります。そこで、授業と家庭学習との連動について、その方向性や具体的な方法について提案をさせていただきます。

授業と家庭学習とを連動させるとは・・・

授業と家庭学習との連動させるためには、「**授業と家庭学習との連動**」を意識しながら、「**授業**」と「**家庭学習**」の両方を工夫・改善していくことが必要です。

それでは、具体的にどのようなことに取り組みたいのでしょうか。以下に、いくつか例を挙げておきます。参考にしていただきながら、各学年の学習内容や発達段階に応じて、工夫した取組みを進めていただければと思います。

① 家庭学習との連動を前提とした授業の工夫

- 家庭学習で取り組んだことを活かせるような授業を考える。
 - 家庭学習で集めた資料の中から、パンフレットに入れるものを授業で選択させる。
 - 授業で作ったクイズを、家の人に出題して感想を聞き、ノートにメモする。
- 家庭学習で取り組むことを前提にした単元構成にする。
 - 家庭・地域での調べ学習を組み込んだ単元構成にする。
 - 授業で学習したことを家庭・地域で生かせるような単元構成にする。

② 授業との連動を前提とした家庭学習の工夫

- 考えたり表現したりすることが必要な家庭学習をさせる。
 - 家庭学習で、家族や地域の人に取材し、必要なことを調べさせる。
 - 日記や作文、紹介文、意見文などを家庭学習で書かせる。
 - 意見文を書くために必要な情報を、新聞やインターネット、本を使って調べさせる。
 - 作文やスピーチに使えるようなネタ（情報）を集めてノートに書かせる。
- 授業の予習をさせることで、授業での思考・表現の時間を確保できるようにする。
 - 教材文を読んで、分からないところや考えたいところに線を引かせる。
 - 作文の構成や下書きを、家庭学習で書かせる。
 - 自分や友だちの作文を読み直し、改善が必要なところに赤線を引かせておく。
- 思考・表現の基礎・基本の力を定着させる。
 - 学習に必要な既習事項、漢字、語句を復習させたり、覚えさせたりする。

③ ①や②を支えるための取組み

- 家庭学習の取り組み方を指導する。
 - 家庭学習の仕方や、ノートの使い方を指導したり、意欲的に取り組んでいる児童を紹介したりする（掲示物、学級通信など）
 - 自主学習の仕方を指導・例示する
 - 家庭学習の定着を家庭へよびかける（学級通信・冬休みのくらし・連絡帳など）
- 提出された宿題を添削し、直しをさせる。最後までやりきらせる。
 - 提出・直しの有無をチェックし、最後までやりきらせる。

*同校の資料をそのまま掲載

れば成り立たない『家庭学習との連動を前提とした授業』（図内①）という考え方もあると思います、提案しました」

具体的な学習は、例えば国語では次のようなものになる。

「①家庭学習との連動を前提とした授業」では、「パンフレットをつくらう」という活動の中で、「保護者や地域の人に話を聞いたり、自分で資料を集めたりすることで、地域で守りたい環境を探す家庭学習が考えられる。これは、環境保護について教科書の教材文で学ぶ単元で課された宿題だ。題材を探す活動を

家庭学習で行うことにより、授業では、考える活動が確保される。個人で探した題材を授業に持ち寄り、グループでパンフレットにする題材を確定することで、選んだ題材についての思いを伝える場を授業にもつくること出来る。家庭学習で行うと効果的なことを考えて、授業を構成する流れだ。

「②授業との連動を前提とした家庭学習」では、作文の授業の前に書きたいテーマを家で考えてくる、という家庭学習が考えられる。「授業では書き方を伝え、子どもが考えて表現する時間を十分に確保したいのですが、

そうするためには作文のテーマを考える時間も必要です。授業のねらいを考えた上で授業構成を練ると、授業では書き方の指導、または思考や表現の時間を重視し、作文のテーマは家で決めてきてもらおう、と判断できません。単元を構想する際に家庭学習についても併せて考えると、指導の幅が広がるのではないかと思います」（愛甲先生）

効果を高めるポイント

課題の内容と事後の指導で個々の学力差に対応

思考力や表現力が必要な宿題を課す場合、それらに取り組みむことが難しい子どもへの配慮が必要だ。愛甲先生は次のような点に留意しているという。

一つは、どの子もある程度の結果を出せる課題とすること。例えば、問題の解き方を考える宿題では、質は問わず「1人3通りを考える」など時間をかければ出来るものにする。

もう一つは、考え方や表現の仕方を事前に指導すること。作文や読書感想文を課す時、「書いてきなさい」というだけでは取り組めない子どももいる。事前にテーマの選び方や構成の方法を指導することが大切だ。

「出来事を羅列するのではなく、中心となることを2、3個に絞って書くように授業で指導しました。その後、家庭学習の課題に作

授業づくりと共に深める家庭学習



写真 教室に家庭学習ノートのコピーを掲示して、どのような学習をすればよいか分からない子どもにヒントを与える。掲示された子どもにとっては、学びのモチベーションになる

文を出したところ、どの子どもも学んだことを生かした作文を書いていたことがありました。こういう時に子どもを褒めると、これからも授業で学んだことを生かそうという気持ちが高まると思います」（愛甲先生）

思考力や表現力が必要な家庭学習に限らず、個々の子どもの課題への対応が必要な場面もある。同校では、これらに対して次のような手立てを取ってきた。例えば、自主学習では何をすればよいか分からない子どもがいるため、教室に家庭学習ノートのコピーを見本として掲示している（写真）。さまざまな自主学習を見て、「こんなことをすれば良いのか」と気付き、自分の学習に取り入れる子どもも多いという。

また、どの教師も、専科などの教師と協力

しながら、宿題をその日のうちに添削し返却している。誤答があったプリントは、教室の所定のカゴの中に返却し、子どもは自分のものがあれば休み時間に解き直す。すぐに復習することで効果が高まる他、毎日の宿題にも前向きに取り組むようになる。

「子どもは、教師が自分のことを見ているかどうかには敏感です。低学年の子どもは、花丸の花びらの数を数えるほどです。たとえ大変でも、宿題を提出したその日に返却することに大きな意味があるのです」（山平校長）

成果

授業研究の土壌を生かし 研究を深化

これまでの実践を通し、愛甲先生は、授業と家庭学習の連動により、思考力や表現力の育成という目標達成により近付けると感じている。学校全体での本格的な検討はこれからだが、指導案に「授業と家庭学習との連動」の視点も盛り込むことで、教師の家庭学習への意識は高まってきた。保護者へは保護者会や学校だよりで学校の考え方を伝えると共に、「保護者に聞く」などの課題を子どもに出すことで、学習内容に関心を示す保護者も増えている。

同校では、授業研究において、実践を基に気兼ねなく話すことを大切にしてきた。良い

と思うものはまず取り入れ、実践について全員で議論し、次時の具体的な指導案を考える、という研究方法もその表れだ。愛甲先生は、家庭学習の検討についてこう話す。

「家庭学習には、『こうすると絶対に良い』という正解がありません。研究では家庭学習のみを考えるわけではなく、全体のバランスも大切です。これまでは、他の学級担任がどのような家庭学習を出しているのを見ることがあまりありませんでした。今後、子どものノートを見せ合ったり、『このような家庭学習をさせると良かった』という声を集めたりしながら、子どもにとって良い家庭学習を考えていきたいと思っています」

山平校長が重視する

校長としての役割

先生一人ひとりが挑戦しやすい環境を整えることが、第一の仕事です。組織や予算の調整、情報収集、発表の場の設定などの条件を整え、先生方が余計な心配をせずに研究を進められるような配慮を常に心掛けています。学校の中だけでは分からないこともありますから、外での実践や、講座からの刺激で、常に挑戦したくなるように先生方を促すことも大切にしています。

決して忘れてはならないのは、私たちの仕事は必ず子どもに還元される必要があるということです。常に子どもの姿を見つめながら学校づくりを進めています。